

高齢者の「安心・自立居住」を可能にする コレクティブタウンの成立要件に関する実践的研究 真野地区における高齢者の生活実態調査を通して

乾 亨*

神戸市長田区真野地区は高齢者が住みやすいまちだと言われている。本研究の目的は、この真野地区を調査対象として、高齢者の安心・自立居住を可能とするコレクティブタウンの特質とその成立要件を明らかにするとともに、真野地区における今後のまちづくり活動の課題を明らかにすることである。そのため本研究では、高齢者に密着し、ヒアリングと行動観察を通して個々の生活世界を記録化する「定人観察調査」(第3章)と、その調査で明らかになった高齢者の居場所を定点観測し、そこで高齢者の行動や他者との関わり方をヒアリングと観察によって記録化する「居場所調査」(第4章)をおこない、「たくさんのチャンス」(地域福祉活動や各種まちづくり行事の充実による出会いの機会)、「多層の人的ネットワーク」(身近な地域住民組織リーダー層の見守り～近所づきあい～身内)、「たくさんの居場所」(公園や銭湯、喫茶店のようにネットワークの結節点になりうる居場所に満ちた「まちの形」)がセットになって相互連関的に作用することで、高齢者の安心・自立居住を可能にするコレクティブタウンの構造を明らかにした。これらの結果から、高齢者の安心・自立居住を果たすためには単に福祉施設や福祉活動の充実だけでは不十分であり、様々な出会いの場を提供する地域活動や住み慣れた「まちの形」を壊さない(あるいは再整備する)居住環境整備等「まちづくり」の視点を併せ持つことが求められることがわかる。

キーワード：高齢者、コレクティブタウン、安心・自立居住、福祉、地域コミュニティ/まちづくり

目次

- 1 研究の目的
- 2 研究方法
 - (1)対象地区の概要
 - (2)調査概要
- 3 高齢者の生活世界からみる安心・自立居住の仕組み
 - (1)調査方法
 - (2)高齢者の生活世界の特性
 - (3)安心・自立居住を支える要因
 - (4)高齢者を支える仕組みの評価

- 4 居場所における高齢者の生活実態
 - (1)調査方法
 - (2)高齢者居場所調査の結果と分析
 - (3)高齢者の居場所の特質
- 5 まとめ

1. 研究の目的

今、とりわけ高齢者(生活弱者)にとって、居住環境整備と福祉が一体となった「住み続けてい

* 立命館大学産業社会学部教授

く」ための仕組みづくりは緊急の課題である。

これまでの高齢化への計画的対応は、ともすれば高齢者を施設や介護の提供等「モノ」と「制度」の枠のなかでのみ捉え、「公共に」「助けてもらう」だけの存在とみなしてきた。しかし今や、高負担にもとづく高福祉の提供という図式はなりたたなくなってきた。とともに、より本質的な問題として、ヒトは（不足する部分を「介助」されつつ）可能な限り自立的に、「よりよく生きる」ことを求める存在であり、それは、単に「助けてもらう」ことだけでは決して達成し得ないものなのである。いま求められていることは、「施設」や「制度」を越えて（それらの必要性は当然のこととして）、ひとりひとりの高齢者が、住みなれた地域のなかで安心して自立して暮らしていくことのできる仕組みを構想することである。

高齢者が「地域のなかで安心して自立して暮らす（安心・自立居住）」¹⁾ ことができる状況は、住み続けられる住宅の質や家族の存在、ゆるやかな見守りのなかでお互いに支え支えられる地域コミュニティ、そして身近なまちのなかの生活施設（福祉施設や便利施設だけでなく、ゆとりの施設も）の存在等などの総体として初めて可能になるものであるとするならば、ここで問われているのは、近代が別々のものとして分解してしまったあらゆる生活の要素を、やわらかく連結し、住宅と福祉、空間と生活、モノとヒトの有機的協調作用のもとに、「居住 福祉 まち一体型住環境」が、地域の物的・社会的環境の編目のなかで緊密に成立することである。このような、一人ひとりの高齢者の安心・自立居住が可能となるような「居住 福祉 まち一体型住環境」を、「コレクティブハウジング」²⁾ にならって「コレクティブタウン」と名付ける

ならば、本研究の目的は、「高齢者に住みやすいまち」と言われる³⁾ 神戸市長田区真野地区を調査対象として、コレクティブタウンの特質とその成立要件を明らかにすることにある。

2. 研究方法

(1) 対象地区の概要

若年層の地区外流出の結果、早くに高齢化社会を迎えた真野地区は、まちづくり活動のなかで福祉活動（友愛訪問・給食サービス等）に取り組み、地域コミュニティのなかで高齢者を支えてきた⁴⁾。震災後「支えあい」の必要性が再確認され、「ふれあいのまちづくり協議会」活動が活性化し、それと呼応して地区内に、公営の「シルバーハウジング（シルバーハイツ）+ デイケア+ 地域福祉センター」や「コレクティブ・ハウス：真野ふれあい住宅」が建設され、このまちの福祉活動は新しい段階に向かいつつある。と同時に、このまちの下町的つきあいや祭礼（地藏盆など）、そして各種イベント（盆踊りや寒餅つき）は、高齢者に、人と出会い、楽しさを共有する機会を提供しているし、路地の多さ、住工混合地区ゆえの職住近接性や店舗（食堂・銭湯など）の多さといった「まちの形」が、高齢者の暮らしよさを支えている。

参考のため、地区内町丁別独居高齢者数（65歳以上）を表1に示す。

表1 真野地区独居高齢者世帯数('96年度)

地区名	独居高齢者世帯数				地区名	独居高齢者世帯数			
	男	女	合計	寝たきり		男	女	合計	寝たきり
東原池3丁目	1	12	13	1	荻原通2丁目	0	1	1	1
東原池4丁目	4	17	21	6	荻原通3丁目	0	7	7	0
東原池5丁目	9	28	37	2	荻原通4丁目	2	16	18	0
東原池6丁目	6	11	17	1	荻原通5丁目	0	7	7	0
東原池7丁目	5	13	18	3	荻原通6丁目	3	4	7	0
東原池8丁目	4	17	21	0	荻原通7丁目	0	5	5	1
浜邊通1丁目	1	7	8	0					
浜邊通2,3,4丁目	2	18	20	2	真野地区合計	37	168	205	22
浜邊通5-8丁目	0	5	5	0					

（2）調査概要

本研究は、ヒアリングと行動観察にもとづく高齢者一人一人の生活世界の把握を通じて、各高齢者の「安心」と「自立」の状況を知り、それらが何によってもたらされるかを明らかにすることで、総体として地区の備える力を解き明かすことを目指している。そのためにまず、個々の高齢者へのヒアリングと行動追跡調査に基づき、「高齢者が自立しつつ支えられる」ための要件を明らかにすることを旨とする「高齢者定人観察調査」（第3章）をおこなった。次いで、その調査によって明らかになった地区内における高齢者ネットワークの結節点（居場所）の特質を明らかにするため、各居場所での高齢者の生活行動を定点観察することで「居場所＝まちの形」と高齢者の関わり方の特質を明らかにする「居場所調査」（第4章）をおこない、この二つの調査の分析を通じて、真野地区におけるコレクティブタウンの構造を解明した。各調査の方法については本稿3（1）、4（1）を参照されたい。

なお、本研究は、真野地区のまちづくりに深く関わり続けている研究者と、地元地域住民組織「ふれあいのまちづくり協議会」（以下「ふれまち」）との協力の下に行われたものであり、地域の活動に参画しつつ「ふれまち」の今後の課題を明らかにすることを研究の射程に入れている。それゆえ本研究は、対象事例に実践的に関わりつつ、そこから共有化すべき知識を照察し概念化していこうとする Participant Conceptualize（参加型研究）であり、単なる実態調査、理論的検討にとどまることなく、現地の状況を創造的に改変する具体的アクションをおこしつつ、そのプロセスを誘因・発展させる主体的あるいは客観的要件を明らかにしてい

こうとする「アクション・リサーチ」⁵⁾である。

3．高齢者の生活世界からみる安心・自立居住の仕組み

（1）調査方法

調査対象となる高齢者に対して、「行為（買い物等の生活行為、仕事、楽しみ、趣味など）」「他者との関係性（近所、友人、家族、地域組織構成員）」「生活空間圏（行動範囲、行先、店舗名など）」「地域活動の認知度・利用率」「心情（不安や楽しみ、生き甲斐、真野の評価など）」「生活時間」等日常生活行動全般について、1時間ないし2時間（対象者によっては3時間以上）にわたる対話型のヒアリングを行うとともに、調査員が半日ほど行動を共にさせてもらい記録をとる行動観察を行い、個々の生活世界を総体として記録化する「定人観察調査」を行った。調査期間は、'98年の8月1日から16日まで現地に滞在し集中的に訪問調査を行った後、'98年11月から'99年1月まで断続的に追加調査を行った。

調査対象者は、「ふれまち」の協力を得ながら、なるべく地域福祉活動の網目からはずれた（民生委員との接触頻度が低い・給食サービス等の行事への参加がない）独居層を選択的に抽出した⁶⁾。ちなみに、真野地区の独居高齢者数は'96年時で約200名（表1）、給食サービス参加対象者は'98年時で約70名である。総サンプル数は38である（注の⁶⁾に記すように、対象者の条件確認の困難性から、結果的には給食サービス参加層及び独居世帯以外の家族型も混在）。

（2）高齢者の生活世界の特性

定人観察調査データは、全て個人別データ化

表2 個人別データ・シート（例）

A ネットワークタイプ No.31 女 81歳 浜3
 独居 無職 真野在住 50年
 <暮らしの全体像>
 同世代の中でも元気な方で行動力がある。よく歩く。真野地区全体が庭のように感じている。隣人、町の組織と幅広く交流を持ちイベントには必ず顔を出している。給食の場では仕切り役。
 <交友関係>
 ・昔からの知り合いが多く、周りとは自然と仲良くしている。
 ・近所とは物をあげたりもらったりの関係
 ・昔駄菓子屋をしていたので常連が今でも訪ねてくる。
 ・幼稚園、小学生が遊びに来る。
 <家族形態>
 長田区に娘がいて電話をしたら自転車に乗って 10 分で掛けつける。
 <行動の特徴>
 散歩のついでに買物をするので真野地区外の商店街（物も安いし新鮮）へ行く。No.31 さんにとって、人との出逢いを求めて、買物（物の安さ、新鮮さ）、健康（散歩の距離）が行動範囲を決める。毎月 1、15 日は長田神社の祭りに行く。家の中から通る人を見ている。
 <趣味> 散歩、歌謡曲を聞くこと
 <不安・困った事>
 ・一人暮らしだが不安がない。
 ・近隣との助け合い、組織との繋がりも深い、家族が近くににいる。
 <地域福祉センター>
 給食サービスは運動のきっかけ、出逢いの場となるのでよく行く。
 <民生との関わり>
 民生委員を頼っている。（相談役）また、浜 2・3・4 の民生友愛訪問グループ 8 名の名前が言える。
 <デイサービス・ヘルパーとの関わり>
 周りが面倒を見てくれるので必要の無い事が多い。（近隣支え合い）
 <真野に対して>
 ・人に情があるので住みやすいので他の地域には行きたくない。
 ・住民とも組織の人とも強い繋がりがある。（頼り頼られていて）
 ・「歩いてちょうどいいまち」と感じている。
 <その他>
 近所の人とは声の掛け合いをし、また外灯を点灯する事が生活安全の確認の合図としている。
 遠くに行く時は目印としてカーテンを開けていく。
 <生活時間>

No.31								
就寝	6:00	7:00	10:30	12:00	13:00	17:00	20:30	就寝
	ラジオ 水やり	炊事 長田神社 お祭り	散歩 買物	昼食 TV	子供が遊 びに来る	風呂 夕食 TV		

*長田神社のお祭りは毎月 1、15 日に行く

した（例：表2）。それをもとに、各人データを相互に比較しよう整理したものが表3（A～W列）である。この表から読み解きうる真野の高齢者の生活世界の特徴をまとめてみると、以下の通り。

自立志向＝可能な限り自立していきたい

ほとんどの高齢者達は、「一人で（または夫婦で）暮らしたい＝自立居住」を望み、できれば人の世話になりたくないと思っている（「自分でできることは自分でする」 1・30、「動けなくなったら病院に入れて」 6）。同居可能な親族がいても、自分の暮らしを大切にす

ため、独居を望むケースも多い（「同居は窮屈」 3、「子供と暮らすと友人に会えない」 30、「ぼけると引き取られるので、ぼけないように趣味をしている」 4）。

動けなくなる不安と健康志向

病気等で倒れてしまうことは、独居高齢者の大きな不安である（表3 V）。そのため、多くの高齢者は、積極的に体や頭を働かせる努力をしている（散歩・趣味）。

「支え合い」のベースとしての「近所」・「友人」ネットワーク

I・N・W列をみると、下町的な「近所つきあい」が真野の支え合いの基盤をなすことがデータの的にも確認できる。特に、30年以上同じ町に住んでいる者18名のうち15名が、「近所と顔見知り」「よく話す」と回答し、「近所」の存在が「安心＝支え」になっていることがうかがえる。ただ、真野地区居住歴が長くとも、地区内転居者は、近所との関係をうまく築きえていない（6・7・16、いずれも震災後の転居）。このことから、「近所つきあい」によって支えられる範囲はきわめて狭い（町、あるいは路地内程度）ことがわかる。

また、定住性の高さや、もと職場の同僚（近辺の大工場）がいるという地区の特性から、「近所つきあい」をこえた友人関係が成立し、強い「支え合い」の関係を備えているケースも多い（9・10・11・15＝同じ工場OB、34・35＝子供のPTA仲間）。

近所・友人関係は、なによりもそれぞれの高齢者に「自分を知っている人達のなかで暮らしている」と言う意味での安心感を与えるものであり、さらに、有事の安否確認システムとしても有効である（「震災の時すぐに近所の人安否確認に来てくれた」 4）。

外向性 = 働きかける高齢者

当然個人差は大きいですが、真野には外向的で気軽に声を掛け合う高齢者が多い（「友達の友達と友達になる」 3）。12・31は顔も広く、出歩くたびに多くの顔見知り高齢者と出会い、話しをする。また 9・10・11あるいは34・35の友人グループは、そのグループを中核に、ほかの外向的高齢者とも友人ネットワークをの拡がりを持っている。彼らは、人と出会うことを目的に外出（買い物・散歩）し、行動範囲も広い、高齢者ネットワークのキーパーソン達である（31は給食サービス等では仕切役。10の公園仲間のN氏は、10年前に真野に来て、当初知り合いをつくるために公園に来て、10を含む公園友達の緩やかな輪のなかに入るようになって、今では自転車で真野の公園をまわり顔見知りの安否確認を行っている）。また、高齢者に限らず、真野には高齢者に気軽に声をかける住民がいる（「まちを歩いていると知らない人が声をかけてくれる。よその地域では給食サービスの時だけ声をかけてくれるけど、ここでは普通の時にかけてくれる」 5 = 震災後来住者）。

さりげなく高齢者の暮らしを見守る人をLife Watcher（見守り人）と言うならば、上記のごとき「見守り人」の存在は、真野地区が、民生委員や自治会役員、施設職員だけでなく多層の「支える力」を備えていることを示唆している。それとともに、「身体が動く間は高齢者を支える役に立ちたい」とシルバー人材センターに登録している 26や、地域の子供の面倒を見ている 31の例も含めて、他者を支えることは、とりもなおさず自分を支える力（生き甲斐）ともなっている。

支えを求める新規来住高齢者

古くからの居住者が比較的強いネットワークを形成しているケースが多いのに対し、新規来住層、とりわけ震災後真野地区に越してきた（あるいは地区内転居した）高齢者の場合、ネットワークの弱さと、民生委員や給食サービス等地域福祉活動への疎遠が目立つ。それでもまだ、シルバーハイツやふれあい住宅では、キーパーソンを中心に施設内での交流がはじまりつつあるが（17～20）、一人で地域に越してきた層は孤立化の傾向が強い（22・29）。

給食サービスと老人会行事に積極的に参加することで、越してきて3年半で地域になじんでいる 5の例や、「地域行事（シルバーハイツ1階の地域福祉センターで行われる給食サービスや交流会）のおかげで、シルバーハイツ内で仲良しができた」（20）の例が示すように、地域行事はネットワーク形成にきわめて有効であり、そこへの巻き込みが一つのポイントとなる。「しゃべる相手がいなくて寂しい」と交流を希求する高齢者も「給食サービスや交流会は毎回参加。もっと機会を増やして欲しい」（16）と、その効果を裏付ける。「人と話すのが嫌い」で孤立化志向に見える高齢者でも、「くす玉を作って人にあげて喜んでもらうのが生き甲斐」「野菜を作って人に配る」など潜在的にはつながりを求めていることがうかがえる（32・33）。また、「シルバーハイツのなかで（誰か訪ねてきて欲しくて）ドアを開け放している人の家を訪ねた」（17）という例は、住居の構造（開放性）がネットワーク形成に有効に資することを示していて興味深い。

「まちの形」が人のつながりを支える

表3を見ると、「人と出会う場所」「よく行く場所」として、地域福祉センターやデイケアといった正規の福祉施設のほかに、銭湯・路地・

喫茶店・公園・病院(待合室)・商店等まちの生活利便施設が多く挙げられている。11名が「人と会う場所」として挙げている銭湯に注目すると、「銭湯に行く時間が決まっていて、そこで友達に会う」(3・26)「銭湯でいつも会う人と友達になる」(24・25)「銭湯仲間と昼食を食べに行く」(4)と、ここが高齢者のネットワークをつなぐ大切な場として機能していることがうかがわれる。

また、高齢者にとって、「買い物」は単に生活用品を仕入れるための行為であるばかりでなく、健康のための運動であり、また途上で人と出会うという目的もある(31・表2)。さらに、地区内の商店は、「いつか世話になるかもしれないから、地区内で買い物をする」(35)、「行きつけの店がある。店の人が声をかけてくれるから(うれしいから)そこで買う。いろんな情報ももらうし、寝込んだときは家まで届けてくれた」(22=震災後來住)、「おなじ店に行き、顔なじみになる努力をしている」(21=震災後來住)というように、高齢者を支えるネットワークの結節点としての機能を期待されている。

(3) 安心・自立居住を支える要因

コミュニティ安心弁

先述したように、今回の調査はどちらかといえば地域福祉の網目からはずれた高齢者を対象にしているため、当初は、物理的にも精神的にも支えられていない不安定な状況の高齢者の存在を予想していた。しかし(サンプルの少なさと、条件のばらつきによつ誤差はあるとしても)、全体として言えば、多くの高齢者は比較的安定した状態で過ごし得ている(=「安心・自立居住」)。

確かに「身体状況」が思わしくない層は相対的に活動性・積極性が低く、「ある程度の活動できる健康状態」は「安心・自立居住」を支える必要条件ではあるが、前節で明らかにしたように、それ以外にも、高齢者が生活していく上で、心に張りを与え安心感を生み出す要因があり、個々の高齢者はそれらのうちいくつかの要件を満たすことで、それぞれなりの「安心・自立居住」を実現させているようである。例えば、ある高齢者にとっては「近所の人と顔なじみ」であることが気持ちの支えであり(例えば

表4 安心弁類型

グループ	安心弁類型	典型事例NO.
a. 双方向ネットワーク	イ 近所の人とは顔なじみ	2・23・25
	ロ 行き来する特定の友人がいる	19・24・30
	ハ 身内とのつながりが深い	
	ハ-1 子や孫がよく来る・会うのが楽しみ	9・16
	ハ-2 毎日電話をくれる	5
b. 被支援	ニ 頼りにしている人がいる	
	ニ-1 民生委員、施設職員などを頼りにしている	4・18・38
	ニ-2 特定の知人・近所の人が頼り	16
	ニ-3 身内が頼り	29・36・37
c. 働きかけ	ホ 給食サービスや交流会が楽しみ	16
	ヘ 人に会おうために外出する(買い物・散歩・行事)	4・31・34
	ト 人としゃべるのが楽しい	10・34
d. 生き甲斐・自己実現	チ 人の世話をする、見守る役目を果たす	
	チ-1 まちの子供達が遊びに来る	31
	チ-2 お年寄りの世話をする シルバーハウスの世話役	18・20・26
	チ-3 真野在住10年のNは、自転車で知人の安否確認をする	10の談話
	リ サークルや会(老人会・趣味の会・OB会など)に所属	5・28・38
e. 居場所	ヌ 自分のしたいことがある(趣味・生き甲斐)	9・26
	ル 決まった場所がある(決まった時間・決まった人)	
	ル-1 銭湯に行く時間を決めて、友達とおちあう	3・26
	ル-2 銭湯でいつも会う人と友達になる	4・24・25
	ル-3 毎朝同じ喫茶店でモーニングを食べる	4
	ル-4 行きつけの店がある。店の人が声をかけてくれるからそこで買う	22・(21)
	ル-5 公園でおちあう …いつもの人がいないと心配	9・10・11
ル-6 家の前の路地で植木の手入れをしながら知人と出会う機会をつくる	3	
f. 確認	ヲ 安否確認のローカルルールを持っている	
	ヲ-1 外灯の点灯が安全の合図	31
	ヲ-2 表に軍手を吊るすのが安全の合図	12
ワ 安否確保の装備を持つ(緊急通報ボタン付き電話)	38	

2), またある高齢者は仕事や趣味に生き甲斐を見だし心の張りを保持している(例えば26)。こうした、高齢者の心に張りを与え安心感を生み出す要因を、表3のI列(ネットワーク)N列(頼れる人)W列(特記事項)等に注目しつつ、キーワード的に拾い出してリスト化したものを表4イ~ワに示す。これらの要因を「コミュニティ安心弁」(以下「安心弁」⁷⁾)と名付けるならば、表3X列に示すとおり、各高齢者の保有する安心弁の数や組み合わせは個々に異なっている。この組み合わせが、個々の高齢者に固有の、安心・自立居住を支える仕組みと考えることができよう。

当然、保有する安心弁の種類が多い者は、様々な「支え」を備えているという意味において、一般的にいて「大丈夫」⁸⁾な高齢者層である。ただ、表3に示された生活データ内容と照合してみれば、安心弁の保有種類が少ないことが、即、福祉的支援が必要な高齢者とは言い難い。2・23のように、地区全体の福祉の網目から抜け落ちて見える高齢者も、ごく近所の人の見守りのなかで「安心・自立居住」を行っている様が見とれるし(人と出会う場所=路地)、13のように他者とのコンタクトが少ない生活であっても、自分のしたいことをして(この場合は「散歩・墓参り」。午後からは必ず外出する)心に張りを保ち続けているケースもある。とはいえ、見守る側(「ふれまち」)の立場から言えば、安心弁が少ない者、とりわけ近所や友人、身内との双方向のネットワーク(イ,ロ,ハ)を保有しない高齢者は、何らかの目配りが必要な層(「不安定層」と呼ぶ)である(6・7・21・22。安心弁ロを持つ1も、友人が離れており、それ以外の安心弁を持っていないという点では「不

安定層」と見なす必要がある)。

高齢者の支えられ方のタイプ化

これら安心弁は、表4に示すように、<aグループ:近所や友人,身内との双方向ネットワークの存在(イ,ロ,ハ)><bグループ:近所や友人,身内,地域福祉関係者による支援(ニ,ホ)><cグループ:他者への積極的働きかけ(ヘ,ト)><dグループ:生き甲斐や自己実現の手段を保有(チ,リ,ヌ)><eグループ:自分の居場所と思えるところがある(ル)><fグループ:安否確認の機構を保有(ヲ,ワ)>という6つのグループに整理することが可能である。このうちa.b.c.d.は「ヒトの質,あるいはヒトとヒトとの関係性の質」によってもたらされるソフトの安心弁であり,e.f.は,そうしたヒトの関係性をうまく機能させうる地域特有の形や仕組み(ハードの安心弁)といえよう。

安心弁のグループ分類に着目した場合,個々の高齢者の安心弁の組み合わせにより,その人の安心・自立居住の支えられ方として表5に示す5つのタイプを想定することができる。A:

表5 安心自立居住の「支え」のタイプ

A「ネットワーク」タイプ

支え,支えられる対人関係を持つ

近所と顔なじみ・人と話すのが楽しく,積極的に交流・外向的

親しい友人がいる・子や孫(それに類する者)に会うのが楽しみ

B「出会い希求」タイプ

知り合いをつくる努力をする。機会を求めている

C「自己完結」タイプ

趣味・仕事などの活動で満足を得ている

D「他者依存」タイプ

地域組織の人や特定の知人,身内などを頼りにしている

E「孤住」タイプ

なるべく他者と関わらず,一人で生きる

「ネットワーク」タイプは<a他者との双方向ネットワーク>及び<c他者への積極的働きかけ>に、C:「自己完結」タイプは<d生き甲斐・自己実現>に、D:「他者依存」タイプは<b他者からの支援>というソフトの安心弁の各グループにそれぞれ対応している。E:「孤住」タイプは「不安定層」に対応するタイプである。加えて、今回の調査のなかで「ヒトとのつながりが欲しい(今は無い)」と望む事例や、それに向けての努力している事例がある(16・21・22)。これはC・D・EからAに移行する可能性を持つタイプと思われるため、B「出会い希求」タイプと名付けた。

こうした検討を通して明らかになった各高齢者の支えられ方のタイプを表3 Y列に記す。なお、C・Dタイプは現時点では「不安定層」ではないが、身体状況の変化等によりEタイプに移行する可能性がある。とりわけ 29・37のように、老夫婦のみが孤立化しつつ頼り合っている場合、いずれかに万一のことがあった場合Eタイプ化する。このことやBタイプの高齢者の「ネットワークを持ちたい」という要求を考えれば、個々の高齢者の多様な生き方を前提にしつつなお、高齢者どうしの繋がりを豊かにしAタイプの裾野を広げていくことは「ふれまち」の大きな任務といえよう。

(4) 高齢者を支える仕組みの評価

これまで、真野地区の地域福祉活動の紹介は多くなされてきたが、働きかけられる側(高齢者側)からその効果を検証する機会はなかった。本調査は「評価」を主目的としたものではないが、ヒアリングの過程において、高齢者側から見たこのまちの福祉の仕組みの有効性についていくつか確認することができたので、それらを

箇条書き的に整理しておく。

民生委員・友愛ボランティア・町会長・婦人会
これらの人達の認知度・信頼度には大きなばらつきがある。組織を認知しているのではなく特定の個人との関係として捉えるため、よく訪ねてくれるから認知し信頼することになる。とはいえ、最後の安心弁として民生委員の役割は重要である(38)。また、町会長さんがよくしてくれるという話や、婦人会の人が地域行事の案内をしてくれるという話も語られていて、高齢者が多くの地域組織の人の輪のなかで支えられている状況が読みとれる。

行事・祭の有効性

給食サービスや老人会行事等が出会いの場を提供し、友人関係の形成に寄与している。そうした直接的効果と合わせて、「行事があるから外出する」あるいは「行事があるときに友達と誘い合わせて出かける」(3・8)「毎月長田神社の祭礼に行き、帰りには決まった店でロッケを買ってきておかずにする」(31)など、高齢者が行動を起こすきっかけ・理由付け、あるいは生活の区切りとしても意味を持つことが明らかになった。

多層の情報チャンネル

行事などの情報は、民生委員や町役員、婦人会など世話役や掲示板によってもたらされるほか、近所や友人の口コミ、あるいは店の人から(22)もたらされ、銭湯や病院の待合室(4)は重要な情報交換の場である。

また、6名が情報源として地域新聞「真野っ子ガンバレ!」⁹⁾を読んでいると語っており、この新聞が高齢者を支える役割を果たしていることも明らかになった。

4. 居場所における高齢者の生活実態

(1) 調査方法

「定人観察調査」(3章)のヒアリングで高齢者が挙げた主要な「居場所」である喫茶店・銭湯・公園・路地を対象に、一定時間そでの高齢者の行動や他者との関わり方を観察・記録し、あわせて、高齢者に対して、来訪目的等についてのヒアリングを行った。また、喫茶店・銭湯においては、主な客層や高齢者の来店状況、高齢者に対する配慮や真野の地域福祉についての評価などについて経営者ヒアリングも行った。調査期間は6月10日から11月13日¹⁰⁾。

調査のサンプル数は、営業中に観察調査およびヒアリングを行うことになるため、経営者の承諾を得る必要がある等の制限もあり、喫茶店は8軒(22軒)、銭湯は4軒(4軒)、公園は3カ所(8カ所。ただし、2カ所は調査時点に置いては仮設住宅が建ち、公園として機能しておらず、1カ所は工事中。残り2カ所はほとんど利用者なしである)。()内の数字は、地区内の施設総数を示す。

(2) 高齢者居場所調査の結果と分析

まちの形

真野地区の「まちの形」の全体像を把握するため、高齢者が居場所(よく行く場所・人と出会う場所)としてあげた「喫茶店」「銭湯」「公園」「路地」の、地区内における分布を図1に示す。なお、この図には、高齢者が利用する地域福祉活動の拠点(地域福祉センターなど)や集会施設(様々な教室や趣味の会に活用されている)も、あわせて記載している。

図から明らかなように、長屋街区を中心に、巾2メートルに満たない道路や共同通路(いわ

ゆる路地)が極めて多い。戦災を受けなかったため、一辺が大きな正方形の農地割のなかに建設された長屋街区の構造がそのまま残ったためである。個々の長屋は、極めて小規模で老朽化が著しい。近年まで、ここに多くの工場労働者が居住し、地区内の工場や近辺に位置する大工場に勤務してきたが、若い層はより良質な住宅条件を求めて地区外に転出、あわせて、産業構造の変化による大規模工場の操業規模縮小(郊外や海外への移転)等の理由によって、現在は高齢者層の居住が多い。

また、喫茶店・銭湯共に、地区規模(1小学校区・39ha・人口約4000人)に比してかなり多いこともわかる。これは上述したように、この地区が、ピーク時には13,000人(昭和35年)の人口を擁した住工混合の密集市街地であることに由来する。定人観察調査では、図に示した場以外に、病院・診療所の待合室や商店なども居場所として語られていたことを考えあわせれば、地区内における高齢者の居場所の多さがうかがわれよう。

これら路地や喫茶店・銭湯などは、都市計画道路や福祉施設・集会施設や公園などと異なり、一般的な都市整備の概念からはずれた、いわば都市の「スキマ」とでもいうべき場であるとすれば、このまちは極めてスキマの多い地区であり、高齢者たちは、そのスキマを居場所にして機嫌よく暮らしている、という構図が浮かんでくる。以下の居場所調査の結果を基に、その実態に迫ってみることとする。

喫茶店調査

8軒の喫茶店の日常をとらえた観察記録を図2に示す。記録からわかるように、主要な客層は工場労働者であり、高齢者の客はそう多いわけではないが、どの店も常連的な高齢者がいる。

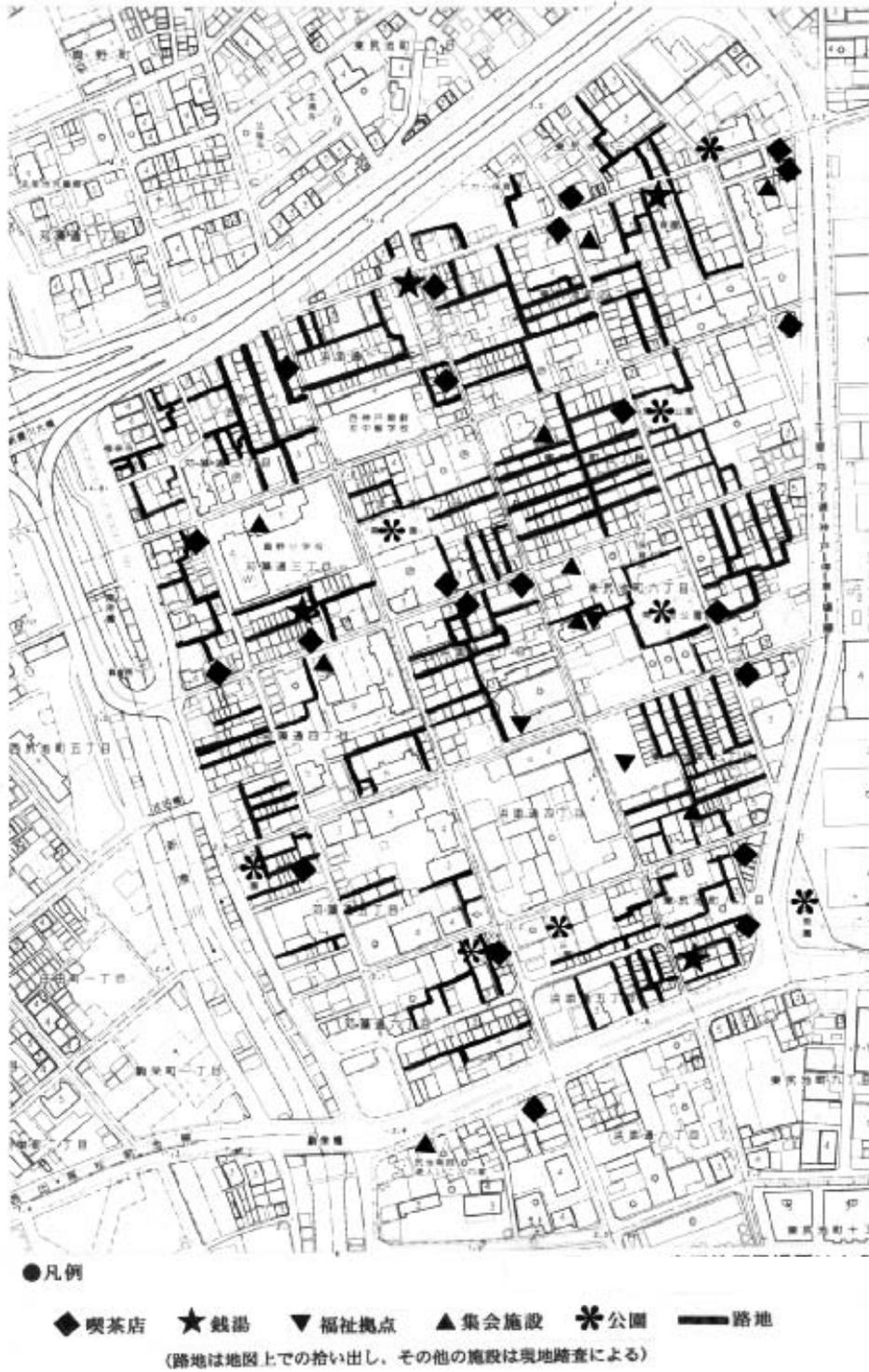
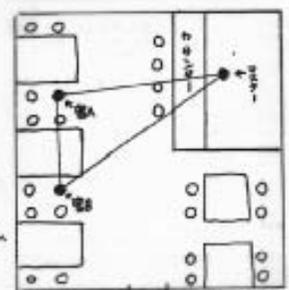


図1 真野地区居場所MAP

<p>1 喫茶M 浜1 99.6.26 15:00~16:00</p> <p>◎経営者：K氏夫妻 周辺状況：工場、商店、住宅</p> <p>◎経営者ヒアリング ◎店舗 工場併設者、昔ながらの喫茶が年1~2回</p> <p>◎店の特徴 ◎高齢者層、まちづくり系 - 周辺開発が進む郊外に引っ越したこともプラスして客がだいぶ増えた。昔は朝から10人来ることも。 - 近所の甲から定額が回っていったり、常連の高齢者が入店してからめったらずの客が来店。 - 高齢者に親しい気持ちで思う、でも高齢者がそれと別の話だと話しているのではない。 - 高齢者がいなくなれば、このあたりは静かになってしまうのではない。 ◎高齢者来店状況 - モーニングの時間に女性の客がある、すぐ近所（園）の人。</p> <p>◎観察記録 - 工場の人が裸になってやってきた。ボックス席から店の人と会話していた。 - 高齢者（女性）一人でやってくる、営業者と会話。その人とはい関係目でもあった。その時は友人が二人いた。</p> 	<p>2 喫茶H 東4 99.6.29 13:30~14:50</p> <p>◎経営者：Hさん 周辺状況：工場、会社、住宅</p> <p>◎経営者ヒアリング ◎店舗 工場併設者、会社の人</p> <p>◎店の特徴 - モーニングや朝食者、経営者も来。 ◎高齢者層、まちづくり系 - 新しい住居は関係ない、高齢者の人の話し相手がないから対面し、何か心配な感じにする。 - 高齢者にはやさしいまちである。しかし、若い人には参加しにくい。 - サービスや接客が充実している。 - 高齢者イベントに参加させることはいいけど、そのあとに関係を持ってもらうにはほしい。（イベントのみの関係で終わりがちだ） - 高齢者は自分からコミュニケーションをとろうとしない。 ◎高齢者来店状況 - 東4地区2.4.5丁目や東4丁目から（東4からも）来る高齢者がいる。 （60歳代でも昼間時分訪れる客もある）</p> <p>◎観察記録 - 工事の人が裸になってくる。この日に来ていた二人は不機嫌な顔をしていた。 - 隣の喫茶店でも見かけたおばちゃん。店の人と会話。 - 前さんが車で喫茶の裏に出に行っていた。（チラシを見て安い所まで出かける） - 工事業者が大人入ってくる。3人多い。 - 勝手に高齢者が店員の人とお話しを始めている。こういうことをよくしているらしい。</p> 
<p>3 喫茶K 荻2 99.6.29 15:00~18:00</p> <p>◎経営者：Oさん 周辺状況：住宅</p> <p>◎経営者ヒアリング ◎店舗 商店街の高級者（一部）近所の常連 工場併設者（最近減少気味）下町の駅</p> <p>◎店の特徴 - モーニング、朝食者 常連でも入れられるスロープを設置</p> <p>◎高齢者層、まちづくり系 - まちづくり新聞や地域活動のことはある程度知っているけれど、あまり積極的に参加していない。 - まちの雰囲気が高齢者を自然と支えているように思える。人があったかい。 - 隣にこもっている高齢者（ここに居たい人）は、道しるべを置いているのではない。 ◎高齢者来店状況 - 近所の商店の帰り（午前中）に来店することが多い。来たら、カウンター近くに座らせて話をする。</p> <p>◎観察記録 - 12時から立ち替わり入れ替わり常連客がやってくる。一客量多い。 - 工場など職場への出勤が多い。（マスターがよく目に行く） - カウンター前は常連が陣取って店の人と会話している。 - 新聞配達員が奥さんの個人用車に新聞配達をする。</p>  	<p>4 喫茶S 浜1 99.6.19 14:00~16:00</p> <p>◎経営者：Fさん 周辺状況：住宅</p> <p>◎経営者ヒアリング ◎店舗 中年男性が多い、昔より女性が増えた。</p> <p>◎店の特徴 ◎高齢者層、まちづくり系 - 常連の年寄り層は少なくなった方が多く、年寄りの常連がいなくなった。 - 真野のまちづくりにについてはよく知らない。 - まちづくり新聞の編集長と同席中。</p> <p>◎高齢者来店状況 - 来店している様子はあまり見られない。</p> <p>◎観察記録 - 一人で来る男性客が多く、雑誌を読むか店の人と会話をしていく。 - 「家事がだるい」と愚痴りに来た女性客。</p>  



・店内では大きな会話の三角形が出来る
光景もよく見られる。（喫茶D）

図2(1) 真野地区喫茶店MAP(1)

<p>5 喫茶A 浜3 99.6.8 11~13時 8.3 9~11時</p> <p>◎経営者 ◎周辺状況：住宅、福祉センター シルバークロス</p> <p>◎経営者ヒアリング ◎客層 高齢者、工場労働者(出勤) ◎店の特徴 モーニング茶 店内狭いため出勤中心、 ◎高齢者観、まちづくり観 ・工場への出勤が多いが高齢者の人なのであまり聞き取り、 ・シフトワークの人はこのあたりが、二、三人しか来ない。 ・そこで高齢者が多いと感じたことはない。 ◎高齢者来店状況 週4日(月大女祝)モーニング時 30~40代代客が来店「慣れているところだから気兼ねせずに来れる」近所でもいつも訪れあって来る。席も場所も決まっている。 ◎観察記録 ・高齢者の個人談話しつつモーニングを食べる。 ・高齢者の人(男)が一人で来店を促しつつ経営者と会話。 ・おばあさんが一人で訪れてコーヒーを飲んで帰る。(11:00頃) ・近所が騒がれているので、高齢者の個人とやり取りが質問にぶらまれている。</p> 	<p>6 喫茶O 東6 99.6.8 14~16時 8.6 16時~</p> <p>◎経営者 ◎周辺状況：住宅、工場 ◎経営者ヒアリング ◎客層 工場労働者 マンション(高齢者向け)住宅</p> <p>◎店の特徴 狭いスペース ワンフロアニューであるが、客がいないので閉店して中を覗いていない。 ◎高齢者観、まちづくり観 ・客層の人は往々としてでも勝手にコーヒーができてきた。 ・高齢者は自分より若い人はいない。前日で一晩して金持ちになった。 ・異業のとき、専門家の先生にお話を聞いた。 ◎高齢者来店状況 高齢者(女性)が週に仕事終わりに来る。 ◎観察記録 ・工場の人(二人組)は所の人と話す様子はない。 ・高齢者(女性)一人で来る。高齢者と会話。 ・女性一人で来る。営業者と会話。これから買い物に行く様子。 ・工場労働者二人組で会話。 ・ある高齢者の奥さん、個人車のモーニングサービス、地域の老人会にはよく行くが、民生委員や夜間救護は自分には関係ない。よく行くところはここ、兵庫。</p>  
<p>7 喫茶G 東7 99.6.23 12:00~18:00</p> <p>◎経営者 ◎周辺状況：工場、住宅 ◎経営者ヒアリング ◎客層 男性中層級の高齢者、工場労働者など。 ◎店の特徴 モーニング茶(メニュー豊富) ◎高齢者観、まちづくり観 ・家は離れているのでここでしか話さない友達多い。 ・あまりこのまちづくりのことは詳しく知らない。 ・震災後に帰ったばかりの上、周りには工場ばかりなので近所付き合いはない。 ◎高齢者来店状況 ・喫茶Gでも見かけた奥さん。喫茶Oと代わる代わる行く。「Oに行くのは必死行かないから」5人(中年女性)と話をする。震災をきっかけに仲良くなる。 ・おじいさんが一人で来る様子。 ◎観察記録 店の人がかウンター前から出て来て話を。 奥さんがいせいか軽く挨拶をしあう。 ・工場労働者二人から個人車乗りに興味をもちながら話をする。 ・一人で来ておじいさん ・喫茶Oで会った高齢者(女性)と主人(中年女性)会話 ・近所の女性客。営業者により積極的に話して店の人と会話。</p>  	<p>8 喫茶D 苅6 99.6.26 14~16時 7.3 11時~</p> <p>◎経営者：T氏夫婦 ◎周辺状況：工場 ◎経営者ヒアリング ◎客層 工場労働者、買い物帰りの女性 ◎店の特徴 モーニング有。 昼の開放もしている。 ◎高齢者観、まちづくり観 ・T氏が真野町志会の役員をしている。 ◎高齢者来店状況 ・毎朝10時30分頃女性がある。T氏の奥さんと話をするのが楽しみでやってくる。 ◎観察記録 ・工場に近い為出勤が多い。若くは工場労働者が火勢来る。予約してある様子。 ・店の人がかウンターから出て客と話す。 ・Nさん(真野まちづくり協議会)一人で雑誌を読んだりゲームをする。 ・三人組の工場労働者。店の人と会話(不祝の節) ・中年女性二人組。店の人と会話</p>  

図2(2) 真野地区喫茶店MAP(2)

近所の人主だが、病院や診療所が近い店の場合、その帰り客が来店しているケースもある(事例3)。高齢者の場合、来店時間がほぼ固定して、日常生活の一部として通ってくる傾向がみられた。

店内で、店主と別の席にいる二人の客の間で大きな会話の三角形ができていたり(事例8)、店主が道ばたの人とも対話していたり(事例2)、概してどの店でも、高齢者に限らず客と店主の間で会話が交わされ、そこに他の客が加

わる場合も多い。決してお洒落ではない入りやすい外観や内装に加えて、このような気さくさが、この地区の喫茶店の特性となっている。

高齢者が連れ立ってくる場合もあるが(事例5)、多くは一人で来店する(事例1・6・7・8)。一人で来た高齢者は店主に近い席(カウンターなど)に座る傾向があり、ほとんどの場合、店主と会話を交わしている。「店主の奥さんと話しをするのを楽しみにやってくる」(事例8)という言葉が示すように、一人

で来る高齢者にとって、店主との会話は来店の大きな動機となっているようだ。店側も、「高齢者が来たらカウンターの近くに座らせて話しをする」（事例3）というように、高齢者に対する心配りをやっている。店主が「（客の高齢者が）心配なので、昼間ときどき訪ねることがある」という喫茶H（事例4）へは、かなり離れたところから来店する高齢者もいるという事実が示すように、高齢者達は人（店主）との関係を求めて喫茶店にやってくる。

銭湯調査（図3）

どの銭湯も、開店前から常連の高齢者が並んで待っていて、開店から2～3時間が高齢者が多い時間帯とのことである。定人観察調査のヒアリングでも明らかになったことであるが、「Aさん、Bさん遅いなあ」（H湯・事例1）「あんた、今日はもう来んかとおもってた」「いやいや、今来てん」（E湯・事例2）等、銭湯で交わされる会話でもわかるように、ほぼ来る時間が決まっていて、いつも銭湯で会う友達ができている。また、店の人（番台）との会話で盛り上がるケースも見られ（K湯・事例4）、喫茶店と同じように店の人との対話も居場所の質に大きく関係していることがわかる。

銭湯に来るとき連れだってくる人はなく、一人で来て、友達と話しをして、一人で帰っていく。「お風呂に来る人はみんなここで知り合った友達だよ」（H湯）というように、毎日同じ時間に銭湯で顔を合わせるというだけの、ある意味で希薄な関係が主のようである。とはいえ、「ここに来るのが楽しみ」（E湯・事例2）や「家の風呂で倒れたら誰も助けてくれへん、ここなら倒れても安心や」（H湯・事例1）のように、銭湯での出会い、あるいは銭湯という居場所は、高齢者にとって極めて大切な場である

ことは明らかである。

ただし、以上は主に女湯における状況であり、男湯の方は、図にも示すとおり、みんなバラバラで、会話を交わすどころか挨拶する者もほとんどない状況である。一般的に男性高齢者は対人関係をつくるのが不得意だとされているが、ここでもその傾向がよよく見うけられた。ただ、事例4のK湯のように比較的古くからの居住者が多い地域では、知り合い同士での会話が成り立ち、子供を叱りとばすカミナリじいさんも健在であった。

公園調査

夏と秋に観察調査を行ったが、小学校の近くにあり規模の大きなM公園以外はほとんど利用者はいなかった（図4）。定人観察調査時のヒアリングでは、公園友達がいて公園で集まって話しをするというケースも語られていたが、今回の観察調査では、「天気の良い日は毎日ここで座っている」「ラジオを聞いている高齢者の横にふらっと座って、無言で一緒にラジオを聴いている」（いずれもM公園）のように、公園に来る高齢者は一人で来て、誰かから話しかけられるのを待っているような様子が見てとれる。そしてたしかに、人は少ないにしろ、通りがかりの中年女性が犬を連れて散歩に来た高齢者に話しかけるなど（M公園）、誰かに出会える場としての役割を果たしているようである。

毎日、日課のように来る高齢者が多いことから、日常の行動を律するひとつの目的地になっている可能性も考えられる（この点では、毎日喫茶店に行く高齢者の行動に似ている）。

路地調査

夕方4時頃、路地ではお婆ちゃん（高齢者）とオバチャン（中年）が混じって、3～4人で立ち話をする光景をよく見かける。約束したわ

1 H湯 浜1 99.9.25 15:00~16:00

◎調査者: 1名(女性)
 ◎調査種別: アリソング
 ◎対象: 高齢者、中高年、高齢者の人も多い。
 ◎目的: 高齢者の生活の質を向上させ、生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。
 ◎調査結果: 高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。
 ◎調査結果: 高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。

2 E湯 東4 99.6.26 18:00~19:00

◎調査者: 女性(夫婦)
 ◎調査種別: アリソング
 ◎対象: 高齢者、中高年、高齢者の人も多い。
 ◎目的: 高齢者の生活の質を向上させ、生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。
 ◎調査結果: 高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。
 ◎調査結果: 高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。

3 M湯 新3 99.9.26 15:00~17:00

◎調査者: 男性
 ◎調査種別: アリソング
 ◎対象: 高齢者、中高年、高齢者の人も多い。
 ◎目的: 高齢者の生活の質を向上させ、生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。
 ◎調査結果: 高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。
 ◎調査結果: 高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。

4 K温泉 東8 99.9.16 15:00~18:00

◎調査者: 男性
 ◎調査種別: アリソング
 ◎対象: 高齢者、中高年、高齢者の人も多い。
 ◎目的: 高齢者の生活の質を向上させ、生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。
 ◎調査結果: 高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。
 ◎調査結果: 高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること、高齢者の生活の質を向上させること。

・H湯 男

・H湯 女

・E湯 女

・M湯 女

・K温泉 男

・K温泉 女



図3 真野地区銭湯MAP

けでもなく、家の延長上である路地で自然発生的な輪ができるようである。「近所」という縁なので、喫茶店や銭湯でのつながりと異なり、年齢差はかなり大きいですが、それが高齢者にとって大きな安心を提供しているようである。

図4に路地でのヒアリングを収録しているが、「天気の良い日は椅子を出してみんなで話す」というように、この地区では、路地が人と人とをつなぐ居場所として機能していることがわかる。高齢者を見守る側も、路地を介して目視できることが見守り活動の基本になっていることがうかがえる。「マンション暮らしの不安と寂しさから路地に越してきた」人がいるという事実は、高齢者にとって、このような、場を介して認知してもらえるような居場所の重要性を如実に示している。

自立を志向する高齢者たち

「民生委員や友愛訪問は自分には関係ない。よく行くところはここ（喫茶O）やK温泉」（喫茶O）、「地域福祉センターはご隠居さんのいくところや」（K温泉）という言葉が示すように、いろいろな居場所で出会った高齢者は、誰もが、自らを「福祉の対象＝支えられる存在」とは考えておらず、それ故当然、地域の福祉活動に頼らず、給食サービスを受けず、地域福祉センターを利用することもない。このようなタイプの高齢者は、今回調査対象とした「まちなスキマ」的な居場所で人と出会い、会話や相互確認のなかで、無意識のうちに支えられ安心を獲得する。

(3) 高齢者の居場所の特質

以上のような居場所調査の分析を通じて、以下のような安心自立居住を可能にする居場所と高齢者の関係の特質が明らかになった。

「場所」が介在する安心自立居住

3章・4章の成果を重ね合わせてみると、真野地区における高齢者の安心自立居住の支えられ方には、人的ネットワークによる見守りや各種地域福祉活動など、地域住民組織により意識的に構築される人と人のつながりによって意図的に安心自立居住を支える状況のほかに、種々のイベントでの出合いやたくさんの居場所での出合いなど、意図せず起こる他者との出合いによる相互確認がもたらす安心感によって高齢者が支えられるようなあり方がありそうである。

前者のような支えられ方を「支援」型、後者を「網目」型と名付けるならば、「網目」型は、喫茶店や銭湯、あるいは路地空間のように、物理的に存在する空間（場所）が介在し、その場で偶発的に重なり合うことによって生成する人と人との（往々にして束の間の）出合い・つながり（会話や認知されているという実感）が、高齢者の安心感や自立への意欲を生み出す源となっているように思われる。とすれば、「網目」型の支えの質は「まちな形」によって左右されることになる。

出会うために出かけるのではなく、出かけることで出会う

今回出会った高齢者の多くは、基本的には一人で出かけてくる。しかも、わざわざ人に会いに行くのではなく、日常の行動パターンの中に組み込まれた居場所に行き、そこでたまたま誰かに出会うことから関係がはじまっている。同じ様な行動パターンで同じ場所に行くので、いつも出会う相手と居場所友達（その場所だけの友人関係）になる。その結果、その場所に行くのが楽しみになるし（会えるのが楽しみだ）、相手も自分のことを友達とってくれていることが自分の心の支えになるのだが、これまでの調査で明らかになったように、その関係はその

<p>1 M公園 浜2 09.8.4 14~18時 11.3 15~19時 11.13 15~19時</p> <p>◎利用者：午後からお散歩まで様々だが、お散歩の利用は見られない。</p> <p>◎観察記録</p> <p>*8.2 男性人と犬2匹が散歩に来る。カゴを置く男性は「ペン子で」女性と、自転車でも。人のところへ行つて、散歩する。犬2匹に餌をやる。</p> <p>10:30 車に牽下の男性と聞かれる。目の真横に歩く。(「左側ではないよう」)</p> <p>10:35 じ、無言で立ち去る。</p> <p>*11.3 公園掃除する人あり。男さんがペン子に座っている(9時から、天気がいい日はいつも)</p> <p>10:30 犬連れ犬男性が自転車に乗られる。「家の中で飼っているので、犬の毛を舐めてよいです」</p> <p>10:50 通り抜ける女性も。(買い物に行くそう)</p> <p>◎観察者同様の状況</p> <p>*65歳 192歳</p> <ul style="list-style-type: none"> - 公園のすぐ西側に住んでいる。 - 男さんと二人暮らし。 - 8:00~10:00頃まで歩いている。 - 天気がいい日にはいつも歩いている。 - 駅からは真野内を散歩。真野は行きつくしたので、特に行く所は決めている。 <p>*72歳 197歳</p> <ul style="list-style-type: none"> - 近所に住んでいるのでここに来る。 - 人と話さずするのはここに来たときぐらい。 - ここ以外で行く所は結構ある。 	<p>2 A公園 苜5 09.8.2 7~18時 11.3 10~13時 11.13 10~13時</p> <p>◎利用者：高齢者をたまに見るが、利用者は少ない。</p> <p>◎観察記録</p> <p>8.2 誰もいない</p> <p>11.3 犬の散歩に来る人 公園を通りがかった女性同士で会話。通行に利用する人が多い</p> <p>11.13 誰もいない</p> <p>◎公園自体新しいし、ゴミもなくてきれい。</p> <p>◎ゴミ箱が3個もあり、通りがけ荷ゴミを捨てて行く人が多い。</p> <p>◎公園の西側は阪神高速へ向かうトラックが多いので子供には注意が必要？</p> 
<p>3 K公園 苜6 09.8.2 7~18時 11.3 10~13時</p> <p>◎利用者：きれいに掃除されているが利用者はあまり見られない。</p> <p>◎観察記録</p> <p>8.2 誰もいない</p> <p>11.3 掃除をしている男性 →向いの家に住んでいて、真野には70年住んでいる。掃除は毎日の日課。</p> 	

◎路地・路上

◎高齢者の状況

天気のよい日は椅子でも出して、話をしている。

- ・一人になっても近所の人がいるから安心。(東尻池7丁目路地)
- ・いつも立ち話をしている。(東尻池8丁目路地)
- ・どこの家の子も自分の子供みたいにかわいい。(東尻池8丁目路地)
- ・マンションに一人で暮らしていたが、近所付き合いもないし寂しいのでこの路地に引っ越してきた。(東尻池7丁目路地)
- ・一人で居るときに地震があったり何かあったらどうしようと不安。(苜6丁目路地)

◎おとしより以外の人達の状況

あそこのおばあちゃん、元気してるか心配、ちょっと見てみよう。

- ・夏は戸を開けっぱなしにしているから近所の様子が分かるが、冬は戸を閉めてしまうから心配。(東尻池 7丁目路地)
- ・冬は夜電気がつくのを見て隣が元気かどうか確認する。(東尻池7丁目路地)

図4 真野地区公園・路地MAP

場所限りのものであることが多い。それが「網目」型の支えられ方の特性だとすれば、当然、いつも行く居場所が無くなると、そこで生成されていた関係も絶たれて、網目が失われることになる¹¹⁾。

高齢者の行動パターンの結び目としての居場所

「真野の高齢者は一体何処に集まっているのか」...これは調査に取り組む際の素朴な疑問の一つだったのだが、観察調査で見える限り、たくさん的高齢者が安心を求めて集まるような場所（高齢者の巣）はない。ただ、個々の高齢者がそれぞれ自分のパターンで行動するなかで、動きの濃くなるどころ、行動パターンの結び目となるような行きやすい場所、居やすい場所がある。それが喫茶店や銭湯、公園や路地などであり、これらの場所は物理的にも「開かれた場所＝まちのスキマ」であるとともに、対人関係的にも、店主や客同士の関係がその場でだけ開かれ結ばれる結節点である（当然、その後もっと密接で恒常的な関係になる場合もあるが）。

以上により、コレクティブタウンの成立要件として、高齢者の行動と交流の結び目となるたくさん居場所（たくさんまちのスキマ¹²⁾）が必要なことが明らかになった。しかも、こうした場所は決して福祉施設を充実させることで代替できる質のものではないため、（施設の充実と併行して）スキマの多いまちを創る（あるいは残す）ことが求められている。

5. まとめ

今回の調査からみて、高齢者一人一人の生活世界が異なるが故に、個々の支えられ方は多様であり、決して単一の方法だけでフォローする事はできないことは明らかである。例えば、民

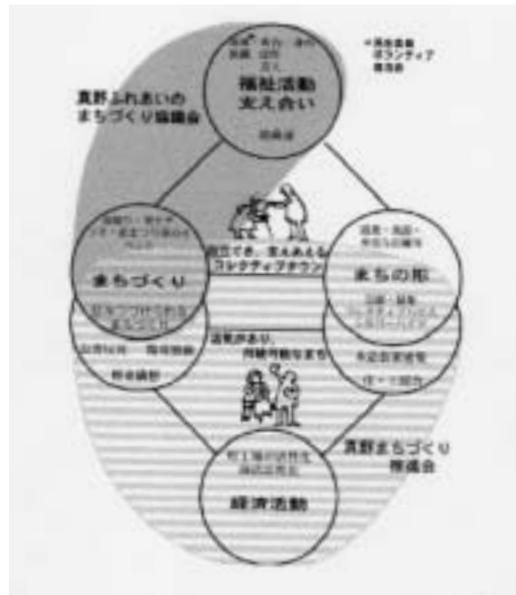


図5 真野コレクティブタウンの構造

生児童委員による見守りやデイケアセンター等といった制度的支援、あるいは地域福祉センターの活動やボランティアによる給食サービス等の仕組みは、高齢者を支える「福祉」(welfare)として不可欠のものであるが、真野地区の高齢者の「安心・自立居住」(well-being)は決してそれだけに頼るものではなく、多種多様な安心弁の組み合わせによって成立している。そしてそれを成立させているものは、第一に、給食サービスや友愛訪問等の地域福祉活動や各種まちづくり行事の充実による出歩きや出会いの機会の創出（たくさんさんのチャンス）、第二に、民生委員や友愛ボランティア・婦人会・町内会役員やあるいは施設職員等の地域組織構成員～近所・友人～身内という、行動目的も活動範囲も異なる多層の人的ネットワークの存在、そして第三に、公園・銭湯・店舗・喫茶店・路地など、ネットワークの結節点となりうる居場所（＝まちのスキマ）に満ちた「まちの形」（たくさんさんの居場所）という三つの要素であり、これ

らがセットになって相互連関的に作用しあうことで「安心・自立居住」が可能となっているという構造が明らかになった。

ただ、真野地区の多くの居場所(喫茶店や銭湯)が工場労働者を営業基盤にしているように、たくさんの居場所は(場所も、店主も)決して高齢者福祉のために存在するのではなく、地域の都市構造、産業構造と密接に関連しながら存在するものである。とするならば、これからの高齢者福祉(well-being)は、狭義の福祉施策(施設・制度の整備や地域福祉活動の充実)にとどまるのではなく、生業づくり・地域活性化なども含めた総合的なまちづくりの中で取り組まれていく必要がある。

「たくさんのチャンス」「多層の人的ネットワーク」「たくさんの居場所」のセット性・相互連関性こそが真野コレクティブタウンの本質だとするならば、表5のAタイプの裾野を広げ、Bタイプの希望に応え、Eタイプをフォローし、C・DタイプがEタイプ化しないような状況を創り出すためには、地域福祉活動の充実を図ることや、地域内での交流イベントを活性化させることとあわせて、「まちの形」、即ち銭湯や店舗、路地性等を継承持続させていくことが求められており、そのためには、地区内の町工場の再活性化や、低廉で良質の若年労働向住宅の供給等への取組も必要となる。

真野において、福祉活動や行事は「ふれあいのまちづくり協議会」が、「まちの形」の整備及びそれを支える経済活動は「真野まちづくり推進会」がそれぞれ担っているが、今後は両者が協力し両課題に総合的に取り組む視点が求められる。以上を概念化したものを図5に示して真野まちづくりへの提起とする。

注及び参考文献

- 1) 自分の存在が認知されない寂しさや突然倒れて誰にも気付いてもらえない状況への不安等に苛まれることなく、住みなれた地域のなかで、基本的には自分の力と意欲で自立的に日々平穩に暮らしていくことのできるような状況を指す
- 2) 小谷部育子、『コレクティブハウジングの勧め』、丸善株式会社、1996年
- 3) 高橋重宏・宮崎俊策・安藤丈弘編著、『ソーシャルワークを考える』、川崎書店、1981年
- 4) 延藤安弘・宮西悠司「内発的まちづくりによる地区再生過程 神戸市真野地区のケーススタディ」、『大都市の衰退と再生』、東京大学出版会、1981年
今野裕昭、『インナーシティのコミュニティ形成 神戸市真野住民のまちづくり』、東信堂、2001年
- 5) 舟橋国男、「ワークショップにおける参加の意味」、『地域開発96・12』、p9~13
- 6) 調査は、'97年夏の予備調査によって調査の方法及び視点を明確化した上で、'98年夏及び秋の2回にわけて行った。対象とする高齢者の抽出は、予備調査段階では、なるべく多様なタイプの独居高齢者の選定を地域民生委員に依頼し、4名の対象者の調査を行った(表3-2 4・26・27・31)。ただ、民生委員とつながりが深い(民生委員が紹介できる)高齢者は比較的外向的な方であるのに対し、「ふれまち」の求めるデータは、これまでの地域福祉活動で支援しきれない層の実態と今後の取り組みの方向性である。

'98年調査においては、婦人会と本研究班学生グループが協力して、真野ふれあい住宅1階食堂において高齢者対象のモーニング喫茶サービスを行い、学生グループが給仕ボランティアとして、訪れた高齢者と交流した。主な目的は、既存の給食サービスに加えて新しい高齢者の場を創り出すボランティア活動であるが、それと同時に、新たな(民生の把握していない)高齢者と接触し、ヒアリングに協力して頂ける関係づくりを意図し、主に、喫茶に一人で来た、話し相手がない人を中心に調査を依頼した。秋期調査では、延べ1147名(実数221名)のモー

- ニング参加者リストから、給食サービスに参加していない独居高齢者を選定し対象とした。
- 7) ここで言う「安心弁」とは、必ずしも物理的な意味での安全確保のためのシステムではなく、個々の高齢者の「安心」感を支える仕組みのこと。
- 8) ここで言う「大丈夫」とは、新たな福祉サービスの対象と考えなくて良いという意味
- 9) 震災後、住民主体で復興まちづくりに取り組むために設立された「真野地区復興・まちづくり事務所」が、情報が届かず孤立しがちな住民を対象に毎週発刊し続けた地域新聞。震災後多くの地域で地域情報紙が発刊されたが、この新聞のように住民自身により編集・発刊されたものは少ない。全戸配布で、'99年8月まで継続された。真野地区復興まちづくり事務所編『震災の記憶と復興への歩み』1997年、真野っこ
- 10) この期間中に、喫茶店9回、銭湯4回、公園6回、路地3回、それぞれ現地に2～3時間調査員が滞在し観察及びヒアリングを行った。
- 11) 住み慣れた場所を離れての仮設住宅暮らし、あるいはその後の震災復興公営住宅での暮らしで多くの高齢者が孤独死した。また、市街地再開発事業のなかでつき合いの場が大きく変容してとまどう高齢者も多い。安武敦子「再開発住

- 宅の暮らし』『住宅建築'96・6』建築思潮研究所
- 12) 人々の生活の営みの結果として非計画的に生成される都市内のオープンな（誰もが寄り合うことのできる）物理空間を意味すると同時に、その物理空間の性格によってもたらされる、他者との偶発的で自由なコミュニケーションが生成しやすい社会空間を意味する。

< 追記 >

本研究は、筆者が「真野コレクティブタウン研究会」の一員として、1998年度住宅総合研究財団研究助成、1999年度トヨタ財団研究助成を受けておこなったものである（共同研究者：延藤安弘・宮西祐司・森永良丙・森祥子・大森靖子）。第3章は住宅総合財団研究年報第26号に発表した報告の一部を加筆修正した。

< 研究協力者 >

調査ヒアリング及び図版作成は以下のメンバーの協力のもとにおこなった。

三好裕子・山本裕治・坂井志帆・末富智子・金安秀史・皆木孝之（以上、立命館大学産業社会学部'98年度3回生）、中筋和道・広瀬智佳子・中嶋美智子・川口由美子・湯田晃久（以上、立命館大学産業社会学部'99年度3回生）

Practical Study on the Condition of Collective Towns in which Elderly People Can Live with “Well-being and Self-help”: Through a Survey on Elderly Lifestyle in Mano District

INUI Koh *

Abstract: The Mano district in Nagata Ward, Kobe, is known as a comfortable and habitable area for the elderly. This study aims at both clarifying characteristics and set-up conditions of a collective town where the elderly can live with well-being and welfare, indicating the issues and problems related to its realization.

In this study, we made both “observations of elderly people,” recording their life-style and life-environment (Chapter 3) and “on-the-spot observations” recording their behavior and relationships to others (Chapter 4), through intensive hearing survey and observation of their behavior. The survey identified the following three elements acting interdependently as necessary conditions for a collective town;

- 1) “many chances” for meeting with others through participation in local welfare activities and various events of “Machizukuri”, community development,
- 2) “multi-strata activities of human relation network” such as mutual support by local community leaders, neighbors and close relatives,
- 3) “many meeting spots” such as pocket parks, public baths, coffee shops, etc., which function as the network nodes and make a collective town more attractive.

Based on the above-mentioned research, it was concluded that there is need of not only upgrading welfare facilities and activities but also introducing the “Machizukuri” movement, which aims at providing a variety of meeting chances and improving living environment through protection of the beloved old town style to the elderly for their better well-being and self-help.

Keywords: Elderly People, Collective Town, “Well-being and Self-help”, Local Welfare, Neighborhood Community, “Machizukuri [town development & community development]”

* Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University